

3 中金堂の建築

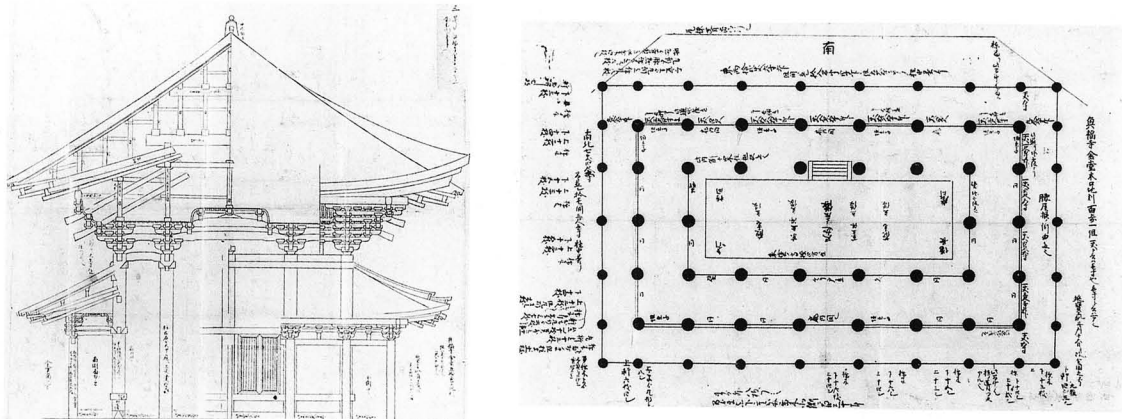
創建期 創建期中金堂は『流記』によってその平面規模が知られる。「宝字記」に「長十二丈四尺」と記される一方、「延暦記」には桁行が「九間十丈五尺」、梁行が「五丈八尺」と記され混乱があるが、これらの寸法は現存する中金堂遺構の裳階を含めた桁行全長、廂の桁行・梁行にそれぞれよく合致することから、桁行七間105尺、梁行58尺の主屋の四周に裳階が廻り、桁行全長が九間124尺となることを意味するものと解される。南都の大寺の金堂として、規模、形式ともに最も整った代表的な建築といえる。平面柱間寸法は大岡實が礎石の地表観察に基づき復原を試みている（大岡『南都七大寺の研究』中央公論美術出版、1966年）。桁行は身舎中央三間各16尺、両端間14尺、廂14尺、裳階10尺、梁行は身舎二間各15尺、廂14尺、裳階10尺とされているが、身舎、廂の主屋部桁行全長が104尺となり、「延暦記」の寸尺と合致しないという問題がある。

平安時代の再建 最初の火災となった永承大火後の再建建物については『今昔物語集』巻第十二第廿一に、再建供養に際して仏師定朝が天蓋を吊るための部材3本を入れ忘れた逸話が記されている。この部材は中央間の「編入」および「梁」の上に、それらと直交して入れられるとされており、身舎上方の構造として、この再建の直後に同じく藤原頼通によって建設された平等院鳳凰堂身舎同様、大虹梁上に天井桁を置き、組入天井とする形式が想定される。

康和再建建物については『七大寺巡礼私記』（保延6（1140）年）に「金堂一字五間四面、瓦葺、南向、有重閣、有戸、三間、四面有廻廊」と記載されている。「重閣」の語は二重、裳階付きのいずれの場合にも用いられるが、奈良時代同様、五間四面の主屋の四周に裳階が取り付く形式だったと考えられる。また、この時期の興福寺の堂宇の基壇と仏像を描いたとされる「興福寺曼荼羅」（京都国立博物館蔵）では、中金堂の壇の周囲に高欄が廻り、正面に幅の狭い階段が取り付けられている。

鎌倉初期の再建 治承の南都焼討ちの後、東大寺が新しい造営組織と大仏様という新技法の導入によって復興されたのに対し、興福寺は現存する北円堂、三重塔にみられるよう、古代以来の造営組織により、伝統的な形式を踏襲して再建された。「春日社寺曼荼羅」（個人蔵、鎌倉時代）に描かれる中金堂は、桁行七間寄棟造の主屋の四周に吹き放しの裳階がとりつき、南面階段は身舎に対応する幅となっている。

室町再建 嘉暦焼失後再建の中金堂については、『肝要絵図類聚鈔』所収の「中金堂院図」や『興福寺建築諸図』（東京国立博物館蔵）など比較的多くの史料が残されている。後者の絵図のうち中金堂の平面図、梁行断面図は、春日大工によって享保焼失前の延宝年間に実測図として作成されたもので、建築



第3図 室町再建の中金堂（左：梁行断面図、右：平面図（南が上）、東京国立博物館蔵『興福寺建築諸図』所収）

形態が詳しく判明する（第3図）。平面は前身建物同様、五間四面の主屋の四周に裳階を廻す。主屋は現存する東金堂（応永再建）同様、側柱と入側柱を同高とする形式で、瓦葺寄棟の大屋根をかける。その軒先は、裳階屋根よりも外へ出ており、図面より軒の出を測ると、約23尺と破格である。この極端に深い軒を支持するため、組物は尾垂木を二重に入れた四手先とし、両尾垂木の尻を入側柱筋まで引き込んでいる。この構造形式は現存する喜光寺本堂と類似する。裳階は四周吹き放しで、主屋側柱筋には四周に連子窓を入れ、南面中央間およびその左右一間ずつおいた間の計三間と、北面中央間を内開きの扉とする。主屋入側柱筋は北・東・西の三面を壁とし、北面中央間をくぐり戸とする。須弥壇は身舎いっばいに置かれ、南面に一間幅の階段が付く。基壇南面の階段は、身舎桁行に対応する五間幅である。

なおこの図面では、裳階の出が平と妻とで異なる振れ隅となり、また廂の梁行寸法が、背面側13尺3寸5分に対し、正面側は11尺2寸5分と記され、梁行断面図でも正面側の廂の梁行が狭く描かれている。これは回廊棟通りに中金堂主屋南側柱筋を揃え、回廊棟通りの壁を中金堂東南隅側柱まで延長するための仕事とみられるが、現存する中金堂の側柱礎石心から柱位置が大きくずれ、しかも主屋屋根の傾斜が南面と北面とで異なるなど、構造的に特殊なおさまりとなる。

江戸再建 以上のように、中金堂の建築は基本的に創建時の形式を踏襲し続けた。享保火災後にも再建計画が立てられ、詳細にわたる中金堂案の図面が残されているが（木興修三家蔵「興福寺金堂式拾分之間」）、幕府の許可がおりず不実施に終わった。再建は火災から100年余りを経た文政2（1819）年に至り、平面規模を裳階分縮小し、旧身舎部分を主屋にあてて寄棟屋根をかけ、旧廂部分を裳階とする「金堂仮殿」として実現された。仮堂とはいえ、寄棟造裳階付きの形態は往時のイメージを継承したものといえる。明治5年の壬申宝物検査時の写真では、階段は三間幅で、基壇外装は石垣となっていた。

明治維新に際し興福寺の寺院処遇が廃止されると、中金堂も官没され、中教院などに転用された。その際、須弥壇を削り、内部全面にわたり礎石から約75cmの高さに床を張り、一部に天井を設け、いくつかの小部屋を設けるなど、大幅な改造が施された。その後、明治14年2月、興福寺再興復号が許可されると、中金堂も寺に返還され、復旧が施された。変転を経ながらもこの堂は180年の長きにわたり建ち続け、「赤堂」と呼び親しまれるようになったが、第Ⅰ期境内整備事業計画の一環として、平成12年、惜しまれつつ解体された。



第4図 文政再建興福寺中金堂（平成12年解体）